



## べと病・褐斑病の 特徴と対策

【指導員】 園芸課 柿崎 慎悦

夏秋野菜も収穫盛期を過ぎて、成り疲れや草勢の衰えが見られる頃になると『べと病』や『褐斑病』が発生する場合があります。そこで、特徴と対策についてお知らせします。

### 【べと病】

#### ○特徴

べと病は植物の種類ごとに原因となる菌や症状が異なる病気で、ウリ類やネギ類、大根、白菜、ホウレンソウ、ブドウ、バラ、ダイズなどのべと病があります。

主に葉に発生し、始め黄緑色から黄色の葉脈に区切られた角斑状の斑点ができます。湿度の高い時は、病斑の裏面に白色から灰色のカビが確認できます。古くなった病斑は褐色になり、ひどいときには葉全体に広がり枯死する場合もあります。ネギ類やホウレンソウ、ダイズ等では、病原菌が植物の生長点に侵入し、植物全体が黄緑色になり、生育が遅れたり、奇形になったりして被害が大きくなります。発病の適温は、20～25℃で、

高温期前後に発生が多くなる傾向にあります。

#### ○対策

播種または移植直後から、泥のはね返りによるべと病の蔓延を防ぐために、敷わらやマルチを行います。肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは、べと病の発生を助長させるので、肥培管理に十分注意しましょう。銅剤・マンゼブ剤・TPN剤などの**予防（保護）殺菌剤**の有効利用を図りましょう。

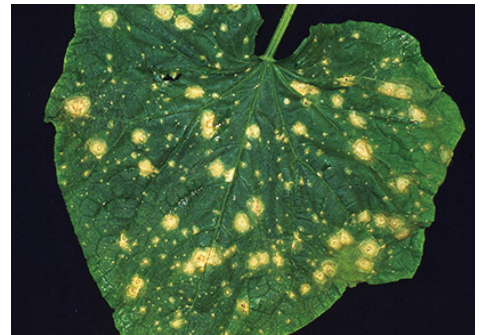


▲べと病に侵されたキュウリの葉

### 【褐斑病】

#### ○特徴

野菜、樹木、草花などさまざまな植物の葉に発生し、80種以上の植物を侵します。また、発病の適温は25～30℃で、高温菌に属します。最初、褐色で健全部分との境がはっきりした小さな円形の斑点を生じます。斑点はやがて褐色ないし黒褐色、円形ないし多角形状になり拡大し、多数の小さな黒い粒や綿毛状の胞子の塊ができます。斑点になった部分は枯れるため、病斑が多くなると株全体の生育が悪くなったり、ひどい場合は枯死したりします。



▲褐斑病に侵されたキュウリの葉

#### ○対策

前年に発生した圃場は病原菌が残っており、発病しやすい傾向にありますので、泥のはね返りによる発病を防ぐために敷わらやマルチを行います。窒素肥料の過多は、耐病性を低下させ、また過繁茂状態になることにより病原菌の蔓延を助長します。また、肥料切れと成り疲れによる草勢の衰えも発病の原因になりますので、適切な肥培管理に努めましょう。薬剤による防除は、治療効果の高い薬剤が乏しいことから、農薬散布は、**予防と発生初期に重点**をおきましょう。

病害による被害をできるだけ軽減するためには、薬剤による予防防除に努めることや常日頃の観察で、病気の発生を初期に見つけることが大切です。

なお、防除薬剤については、JAの各営農センターへお問い合わせください。